

新しい家族のあり方

今回は老人自身ということで、一人のお婆さんとして、どういう風に生きてきたかということも含めて、私の考えている新しい家族のあり方をお話ししてみたいと思います。

会長の二瓶さんからお話がございまして、私は「いやだわ」と言いました。というのは二十何年もお馴染みの会長さんなのですけれども、実は小金井貫井南町に私の長男が住んでおります。どうも講演というのには知らない人ばかりの所がやりいいわけです。お婆ちゃんは何を言っているのかと思ひ、長男も心配するでしょうし、それに今の紹介ですと私はただ役者の姉ということだけですが、まだ亭主がおります。どういうわけか私一人だけ理論物理をやっている人のところに嫁に行ってしまうました。小金井市に住んでおります長男も京都産業大学の教授で言語学を専門とし文字のことなどをやっております。NHKの古代からのメッセージなどにも何回も出ています。そういうような仕事をしております。二番目は機械の勉強をして数学をやり大変親泣かせで、いつまでも大学におりましたけれど、ただいまは東京大学や都立大学でコンピュータを教えており、専門はコンピュータの研究所長をしております。三番目は私の実家から固い商売だといわれていますが岩石学の勉強をしております。そんな三人の子供達を育ててきた平凡な家庭の主婦として活動してきたのです。

身の上話を浪花節で申しますと私は明治三六年四月に浅草の観音様の裏の方で生まれました。私の生まれたことで父は私に非常に期待していたのです。父はいまになりませばNHKの中山晋平役の津川雅彦に似ており、慶応に生まれ明治に育っておりますのですが、役者になりたがっていました。ところが水戸藩出身の祖母がおり、二五〇石取りの人でしたから役者になることはむずかしい立場でしたが、その祖母をくだいた結果、明治で武家の出の人の考え方はすべて立て前でしたが、その祖母がたとえ川原乞食といわれてもよいから何とかして役者にしてやりたいと思ひ、うるさい親戚に歌舞伎の社会で一番偉いのはなにかと聞き、歌舞伎狂言作者にならせ、河竹黙阿弥さんの弟子になりました。そのときもうるさい親戚の中で歌舞伎の舞台に入っても決して紅白粉を塗って舞台上がりませんと一筆認めたということです。それで歌舞伎の世界に入り一生懸命やりましたがやがてうるさい叔父叔母さんがボツボツ死にかけてきたのもうそろそろ役者になってもよいと思ひましたが、結婚して子供を役者にしよう・・・と、役者になる子供を生ませるための目的でお見合いをし、お婆さんを貰ったという念の入った人でした。

父はうぬぼれの強い人でしたので、狂言作者をしてみて俳優さんはなかなかの重労働で体が丈夫でなければ長く続かない、風邪引いた、具合が悪いで休まれてはなにもできない、それにはまず健康な人、次には台詞覚えの悪い人がいて、自分が狂言作者になっても舞台の後ろにいて役者にいろいろ教えてやらねばならない人もいるから、物覚えの良い人でなくてはいけない、その二つがよければ器量くらいは俺に似て何とかなるべえ、と一つ話でさんざん聞かされました。

そういうことで結婚して子どもができましたが昔のことで産声が聞こえたら、父は隣の部屋から「どっちですか」と聞き産婆さんから丈夫な女の子さんだよ、といわれると「ちえっ女か」と舌打ちをして顔も見ないですぐ芝居に行ってしまったということなのです。職業ですから芝居に行くのは仕方がないのですが、名前だけはせい子とつけてくれました。私が泣く度に「うるせい」「うるせい」と言ったとか。

後になってしみじみ思ったのですが、そのとき父が「女かちえっ」と言ったのと男がほしいということは当時当たり前のことでその頃女優者というのはありませんでしたが女優という地位は高まつておりません。私などそういう家でしたから小さいときから芝居にばかり行っていましたのでよく覚えていますが、名人だったという糸八さんをはじめ女優者もいっぱいおりましたが、その人達は歌舞伎座は勿論二流の芝居にも出演させてもらえず、浅草だとか深川の場末の小さな舞台にしか出られなかったので、父の望む俳優というのには必ず男であること、女形にしても男でなければならぬ、自分が育て込んで立派な役者にするつもりが私が生まれたのでどうにもならずご機嫌が悪くどうしようもなかったのです。一年半ほどしていい按配に弟が生まれ、今度は男ですから父は大喜び、泣くたびにこいつは口跡がいいやと言い、今の人はご存じないかもしれませんが、役者は口跡と言われた時代、お芝居の好きな人は何百人何千人と入るところでも始終は行かれないから天井座敷という高いところで一幕見をしたので役者の顔などわかりやしないですから、声がよくなければ駄目なので物干し台などでよく大きな声を出してのどをきたえたものです。ですから弟が泣くとああ良い口跡だと喜んだのです。それで夢中になって弟を仕込んだのです。ところが次はまた女が生まれてこの間「隣と私」「隣の芝生」で沢村さんで随分意地悪いお婆さんね、といわれたのですが最後のところでお嫁さんと仲良しになり、人相が少し良くなったあの沢村貞子が生まれたのです。妹も来年七〇ですが生まれたとき「女かチェツ」ともうまるでかまわれなかったのですが、彼女は自主的に女優になりました。次が明治四四年に四番目に生まれたのが男でそれが加東大介で皆さんにたくさんごひきしていただき幸せだったと思います。本当にいい人で私の「子どもを守る運動」や「障害者の運動」に本当によく協力してくれました。あれが生まれたときは男だから父は大喜びかと思いきや、そうでもないのです。「なあーんだ、この子は色が黒いじゃないか」顔は真っ黒で鼻もあんまり高くないというので、一生懸命母が鼻をつまんでました。けどこれはもう本当の芝居好きで数え年五歳のときから芝居に子供で出ており、舞台で寝てしまったりいろいろと妹が苦労していたようでしたが、私の方はどうでもよい子だから三歳くらいの時から叔母さんの所にくれられちゃいました。くれられたと言いますが叔母は東流二弦琴といいまして今無形文化財になっており子供がなかったものですからそっちの跡取りになれということの数え年六歳の六月六日から踊りや長唄二弦琴といろいろ稽古事をやらされました。ところが私はあまり上手でもないし好きでもなく、そのうち小学校が始まり私は大変に学校が好きで学校へ行って将来先生になろうと思ひ、数え年一四歳でしたか、どうしてもお師匠さんに成るのは嫌だと言って皆を困らせ、それじゃ勉強しても良いと言うことになっ

たのですけれども小学校六年を卒業するとき父が絶対女学校にはやらせないと申しました。私は女学校に行きたくてしようがなくなりましたが、女学校を出たら嫁のもらい手がなくなるからという理由で受験すら許してくれない。本当に浅草ではその時代女学校出の嫁を貰う人はいるかといえませんがよね。明治に小学校に入り、高等小学校を出る頃は大正でしたが、卒業したらなんとか女子師範に入りたいと思っていました。

当時東京の下町で育った女子で少し勉強が良くできたり、上の学校に行ってみたくてという人々がみな狙ったのは女子師範でした。月七円五〇銭くらい、これはたいしたお金なのです。それが小遣いにもらえてその上授業料がただ、卒業したら定められた学校で何年か先生をすればもう免除になって自由、そういうことがありましたから女子師範に行きたくてしようがなかったのです。今の子どもそうでしょうがクラスでいろんな情報をキャッチしてくるのです。当時間も同じでみんなでいろんなことを聞いてきて「せい子ちゃん！女子師範で大変なんですって、学術優秀、品行方正、健康であること」それなら行かれると思っただけでその次で困っちゃったのです。その当時進路就職でむずかしかったものが三つありました。一に銀行、二に女子師範、三に三越百貨店と・・・これは下町の人々にとつて大変な難関で今の東大に入る以上にむずかしいといわれた大正初期の時代なのです。女子師範のむずかしいのはわかっていたけれども、何で日本銀行がむずかしいかといったらいずれも良家の子女でなければ採らないということが鉄則だということです。学校の日だまりで皆クッションとなったものです。学校の先生は皆を教えるのだから良家の人でなければいけないのはわかるけど、日本銀行はなぜと聞いたたらお札を作っているから良家の子女でないとしよいと一枚やっちゃうと困るから・・・そんなこと言って笑って、じゃ三越は・・・それはお年寄りの人は覚えていらっしやるでしょうけれども、三井呉服店からデパートになったばかりで「今日は三越、明日は帝劇」などと言ってそこら中いっぱい広告していました。しかもその当時は職業婦人というのを馬鹿にしていた時代ですから「当デパートに就職なさった方々は職業婦人と申されましても良家のお嬢様方です」というのがキャッチフレーズだったのです。眼鏡をかけているのは採らないとかいろいろ条件がありました。そうするとおせっかいなのがまたやってきて「ちよつと、ちよつと、白木屋なら良家の子女じゃなくても採るってよ」なんて大騒ぎをした時代でした。芝居者などというのは良家の子女とは認められなかったので私は諦めました。その後本当に複雑な道を通って教員になるのですけれど。

まず父に高等小学校を卒業したらお針の稽古に行けといわれ毎日毎日お針の稽古ばかりしていました。浅草近辺が華やかかなりし時代で田谷力三などの「恋はやさし」とかなんとか歌ったりしてたのです。私は父に女学校を嫌う理由を聞きました。女学校の校長なんていうのは芝居小屋に來ないから大嫌いだということです。そこで私も考えて芝居の好きな校長先生の学校なら受けても良いかと聞いたたらそんなのいるかいというから、いつでも家から切符を買って下さる順天堂大学の園長さんが佐藤さんといつてその奥さんが女子美術の校長さん、その人が今は女子美術の付属高女となっていますがその当時は佐藤高女といっ

て、あそこの校長先生いつでも芝居を見に来て下さるし、良家の子女じゃなくても芝居者の子供でも試験に通れば入らせて下さるとのこと、三年の二学期に補欠試験のあることを知り入りました。

その時は四年制ですから一年勉強して、今度はしめた！と思いましたが日本女子大に行きたいと言いだしたのです。そこで父が変な条件ですが土、日と島田に結うのなら行ってよいということで文金高島田を結ってそれで叔母にも話をつけてくれて日本女子大家政科に入ったのです。そこで中等教員になるつもりでしたが、これもまたペンションとなりまして、私もカリエスを病んだしその翌年には大震災で加東大介と沢村貞子と叔母を連れて私は先に逃げ観音様が焼けなかったので生き残りましたけどすぐの弟はもうその時分歌舞伎俳優になって沢村国太郎と襲名し後に映画に入り、ご年配の方はその映画をご存じだと思いますけれど、その弟がいなかったもので私は浅草を立ち去りかねましたけれども、栃木県の戸奈良というところに行ったり、いろいろなことがありました。それでも教師になりたくて文部省の検定を全部とって教師になり浅草小学校に赴任したのです。

やがて栃木県のある校長先生のお仲人で現在の父ちゃんと結婚し五年経ったのです。七四年の人生を何分かでしゃべっちゃったのですが、その忙しいなかでなぜこういう「子どもを守る」仕事に入ったか、その点をちよっとお話ししたいと思います。

子どもを「く」して

これはどういうことかと申しますと昭和八年に今住んでいる市川市に越してきました。私の夫は東大でずっと講師をしたのですが、昔の講師というのは貧乏で恩給にもならない講師で、牧野富太郎さんのことがよくいわれてますが、月給はさっぱり上がらないのに子どもはどんどん増えてくる。はじめは文化的な上野動物園の裏の所に住んでいたのですが、だんだん家賃の安い方と流れ流れて西荻窪の方まで流れ、やがてもっと安いところだったので千葉県へ行ったのです。それでも子どもが三人いて千葉県へ行ってから一人生みましたから子どもが四人いて、時間になればちゃんと帰ってくるお父ちゃんがいて、庭には花を咲かせ鶏を飼って卵をとり・・・まあ貧乏でも楽しいわが家、なにがなくても丈夫な子どもも可愛く育ち、楽しく暮らしていたのです。ところが昭和一二年に私は横っ面をピシヤツと張られるようなことに出会ったのです。

ある日丁度昭和一二年六月でしたけれど、上の二人は小学校へ行って、幼稚園はお金がかかるのでやらないでいたの下下の二人は近所のお子さん達と遊んでいました。お昼ご飯を食べさせると、すぐまた遊びに出して、また三時頃に帰ってきたものですが、さあ手を洗っておやつを食べなさいと手作りのビスケットを食べさせていたのですが、なかなか食べないでゴロゴロしていたのです。そこへ近所のお母さんが駆け込んできて、あなた大丈夫というから、なあに・・・と聞いたら、うちの子どうもおかしいから熱を測ったら四〇度ある、ただ事じゃないから今からお医者さんに連れて行くからと。それじゃ家のもどうな

んだらうと熱を測ってみたら熱が高い。家の鍵を閉めて二人を違うお医者さんに連れて行ったのです。お隣の奥さんがやがて帰ってきてハシカかもしれないから冷やさないでと言われ、家は扁桃腺かもしれないと言われたのです。ところがこれが集団赤痢でバタバタとお隣のお子さんはたった五時間で死んだのです。家の子は病院で五日目に死にました。気の毒だけど下のお子さんも駄目だから諦めなさいといわれたのですが、その一番下の数え年四歳の子だけ残りました。その子が少し良くなったころほうぼうの親が聞くわけです。数え年四歳ですからたどたどしく言ったのは、皆おままごとで遊んでいたのですが市川は砂地なので作るおだんごがなかなか固まらない。ところが一人の子があそこの便所の所にネバネバした土がいっぱいあるからそこから運んできて作れば上手にできるといっているのでそこへ行って運んできてお団子作りをしたのです。ところが後でわかったのですがそこは赤痢患者を隔離しないで自宅療養していた家だったのです。昔は便所は汲み取り式ですから菌がそこら中ばらまかれたのを持ってきて皆でさんざん食べる真似などして遊んだのです。帰ってから手を洗ったってどうにもならないこと、家の子がたった一人残っただけ――。そういうことがあって以来私は夫と妻がいくら愛し合っているいい家庭を作っている、それだけでは子どもは守れないということが身にしみたわけなのです。

児童憲章を生かすために

戦後になって昭和二六年に児童憲章というものができました。これは今の国連の児童権利宣言などと同じくとも立派なものですけれど、法律だけで予算がないのです。いくら親子心中があろうが、子どもが非行に走るいろいろなことをしてもこれを防ぐための予算がなにもついていないただ文章だけなので、昭和二七年に「日本子どもを守る会」が発足したのです。

お医者さんも、漫画家も、看護婦さんもいれば養護の先生も日教組の先生も、もういろんな子どもに関心のある人たちが皆集まってなんとか児童憲章を文句のとおり日本の社会で実現させようということで私たち大勢のお母さん達、私は家庭の主婦ですが子どもを守ることに取り組みました。

私たち夫婦は昭和一六年に東京大学から京城に帝国大学の理工学部ができるので転任で行ったものですから戦後は引き揚げ者で一人千円だけ持って帰ってきて、もう素っ裸でやり直しをしたのです。引き上げるとき子どもが東京へ行ったら母さんなにをするのと聞きますから、何もないといったら、じゃあミシンの頭だけ持ってやる、とあの重いミシンの頭を中学生の子どもが背負ってくれたのです。一人千円の貰ったお金でミシンの足を買って組み立て、ミシンの内職を毎日しました。東京に帰ったら妹や弟の家に居候しようと思っていたらとんでもない、父は高齢者でしたから強制疎開しており東京には誰もおらず加東大介はニューギニアのマノクワリに五年も行っていて昭和二一年にやっと自分の家だと思つて人の買った家に帰ってきて黙って入っていたのです。そんなことで誰一人東京

におりませんでした。私を迎えてくれた人は東京の友達や、前に市川に住んでおりましたからその市川の友達が迎えてくれて・・・住宅事情から六回も移転し、行く先々だんだん荷物が増え、主人は読書家で沢山の本を読みましたが、皆朝鮮でなくしてしまい、小さな辞書たった一冊で帰って来ました。私は子どもを抱えて内職内職の毎日でした。それでも何とか生き残って思うことはやっぱり皆が手をつないかなければ子どもは守れない、ということなのです。

「子どもを守る会」は今年で満二五年を迎えそのお祝いをしました。事務をやっている人は俸給を貰っていますが私たちは無報酬で手弁当で未だにやっているわけです。それが亡くした子の供養のつもりです。運動の中で私は赤痢で子どもを亡くしたからどうしても健康部門の係になりたくて知恵遅れの子ども、身体不自由な子どもと知り合い。その方面の仕事も二四年間やってきました。

ヘレンケラー賞

今年は先ほどご紹介頂きましたようにヘレンケラー賞を頂きました。ほんとうにありがたいと思っています。それはどういう意味かといいますとヘレンケラー賞というのは皆さんがご存じのように明治一三年に生まれたあのヘレンケラーは目も見えない、耳も聞こえない、口もきけない、だけどサリバン先生という家庭教師に恵まれて、一生懸命勉強しようとうアメリカの大学まで卒業し、大学を卒業してから世界の体の不自由な障害のある人を励ますために世界中を旅行して歩き戦前昭和二年には日本に来ておられます。戦後の昭和二三年に来日したとき当時の労働省の婦人少年局長山川菊枝さんをご挨拶なさったのですが毎日新聞社と日本教職員組合の先生達が一緒になってヘレンケラー来日記念として募金をし、財団法人の青い鳥の会をつくりそこで毎年障害者福祉に貢献のあった人を表彰したり研究のお金を差し上げたりしています。図書館の館長さんでも沢山の方がその賞をお貰いになりました。私は日本で四二人目ですが四一人までは全部男の方で多くは聾学校の校長さんとか、盲学校の校長さんとかが多かったのですが、今度私の頂きました賞状には障害者についての運動、それによって表彰されるということが書かれてありましたし、女として初めてなので私は光栄に思っております。やはり手をつないで運動することは意義のあることです。

先ほど紹介のありました私が会長をしております障害者の会は一年になりますが大変長い名前前で、私は落語の寿限無寿限無みたいだというのが、私もはじめ覚えるのに苦労したのですが「障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会」（略称「障全協」という名前です。先だって毎日新聞の人欄の記事に省略して「障害者を守る会」と書いてありました。記者は勘弁してくださいと言いましたが、この会の特徴は障害者と言っても体の不自由な人も、知恵遅れの人も、目も見えない人も、耳の聞こえない人も、しゃべらない人も、難病の人も、感染症の人も、交通事故にあって障害になった人も、すべての障害を受けた

人たちが一緒になって力を合わせて私たちの申し合わせとしてもっと福祉制度をよくしていこうという会なのです。

そういう会がなぜできたかというところは長い間障害者運動をしていて実に皆ばらばらに動いていると感じたのです。手をつなぐ親の会、肢体不自由児協会、目の見えない人たち、みんなそれぞれがばらばらなのです。耳の聞こえない人や目の見えない人はかなり前からちやんと義務教育が位置づけられているけれども他の病気の人には義務教育はほったらかしになっていたり、本当にいろいろなことがあったのです。

この頃は展示の利用が進んでいます。が、鉄道を利用する場合などなかなかうまくいきません。窓口が自動販売機になったときとても喜んだのは聴覚障害の人です。窓口でどこそまでの切符を下さいとなかなかいえないからつっけんどんに扱われたけれども今度は見ていてあそこはいくらとポイントとお金を入れれば切符が買える。ところが困ったのは目の見えない人です。それまでは窓口でどこまでを下さいと言えば買えたのですが今度は窓口がない。自動販売機は見えない。どうするかという問題が出てくる。だから一緒にやってみてむずかしいものだなとわかりましたが、でも皆が手をつないで今月も五、六、七と会を開き、五日が総会、六日が全国集会、七日が各省交渉それから議会との交渉という取り組みになっておりますけれど、そういうのをやってみて初めて大きい力が示せます。例えばこの一年障全協が取り組んでいる問題の一つに雇用の問題があります。この不景気のなかで障害者だって働きたい、けれどなかなか使ってくれない、一番使わないのはどこであるかがやっと去年の暮れに発表させましたら銀行と金融業と不動産業ということがわかりました。去年から義務になって雇用人数の何パーセントか障害者を採用しなければならぬという法律ができたのです。民間会社は一・五パーセント、官公庁は一・九パーセント障害者を使えということです。ところが障害者を使って八万円か一〇万円払うよりも罰金の三万円を出した方が安いから皆罰金を出してしまっている。それもとうとう、どこどこが使っていないかを発表させ、銀行に対してはぜひ使うように先月一〇月二八日石田労働大臣が銀行に勧告をいたすところまでいきました。だからやっぱり運動はやらねばいけないと思います。ところが銀行のいわく、今まで知ってはいたけれど頼む人が定まっていたから来年は雇いましょうということだったので。それでも運動の成果だと自負しております。

そんなことで私の話はだいぶ長くなりましたけれどもわかっていただけだと思えます。ヘレンケラーは昭和四六年に亡くなりました。

新しい家族

新しい家族の話なんです。私は「子どもを守る会」の仕事を二五年して、毎年『子ども白書』の執筆も編纂もしております。子どもの問題はたくさん話したいことがあります。そのなかで今日は簡単に親と子のお話をします。若い家族の親と子の問題の中で非

常に特徴的なことがあります。現代の子どもは簡単に言えば遊ばず、学ばず、手伝わずになっっているのです。家のことを手伝わない、「子どもを守る会」に私がはじめ入った頃に、東京ではさほどでもございませぬけれど、新潟当たりへ行きますと手伝わないというのではなくて手伝いすぎているのです。私たちは母親大会のときに忠告しました。も少し子どもに勉強させなさい、これは昭和三一年頃の話です。もつと勉強させなさい、あれじゃ余りに可愛そうだ、だからちゃんと田舎の学校は農繁期のお休みがあります。そういうときは家のことを手伝いなさいというわけでその代わりに正月休みを短くするかやりくりするけれど農繁期は手伝うための休みですが手伝わせずに可愛そうなほど勉強する暇がない、ところが今はちつとも手伝わない。また親の方も簡単に言えば教えず、躰やなにかも教えるということをしなない、可愛がって、可愛い、可愛いで教えず、叱らず、導けずになっっています。親の方が子どもに対してです。私たちの年配の人でなく今の戦後生まれの人たちはいっぱいPTAで活動しているけれど、話し合ってみると本当に叱らないですね、そういう状態のなかで王様になっちゃっています。子どものいうことはすべてまかり通る時代になって来ています。第一大人が世話をやきすぎている。私たちの時代はあまた子どもができちゃったなんていうわけで自然に子どもができるから大勢子どもがいたけれど今は皆さんちゃんと計画的に作るから私たちの子ども達だって三人男の子がいるから嫁さんが三人、孫が六人、みんなちゃんと日本の平均的な四人家族です。なかには一人でたくさんだなんて一人の子どもを学校では一番にしてその土地で一番いい学校にあげ、一番いい高等学校から一番いい大学に上げて一番いい一流企業に就職させて、とそういうことばかり考えている親だらけになってしまった。そういうなかで非常に親と子の関係がむずかしくなっってきています。子どもの方はちやほやされて育ってきたけれど、今の子どもは我慢がしにくい。私たちは我慢しすぎて育ってきたけれど、今の子どもは我慢ができなさすぎる状態、欲しいものがあつたら今すぐ欲しい。品物が欲しければ万引きにつながる問題も起こるでしょう。勉強ばかりで働けなくて手も足も出ないという子がいっぱいです。今朝も私が出かけてくるとき市川の法華経寺のそばで子どもがちよろちよろ参道を歩いていました。少し歩くにもでれでれして歩いている。足もあんまり使わず先生ここバスがないの？　なんて言って歩いてる。手も使えない。手を使い足を使うことは頭も良くすることだということ。今の親は忘れてるわけです。手を使い足を使えば頭脳に直結しているのだから頭をぼけさせないのです。これは年寄りにもいえると考えています。親の方はどうなっているかといえ、今の若いお父さんもお母さんも物がないと不幸だと思っている。何と何と何が無い、団地へ行くってみると皆同じ間取りだからあそここの家にはこれがあるけれど、家にはこれがないとすぐわかるらしい。ピアノを買えば次々にピアノを買う。教育も非常に熱心で・・・皆が一番にさせたい。四〇人もいれば皆一番にさせるわけにはいかないが、一番にさせたい親は多くまた一〇〇点が好きです。そして子どもにねだられるとすぐ高い物でも買ってやるお母さんが多く、子どもだけが生き甲斐と思う。結婚して十何年もすると父ちゃんも大分わかってくるし、夫が定年退職したらいくらもらえ、その

ときのローンがいくらいくらと先が見えてしまうともう楽しみになるのはあなただけよ、なんて子どもにしがみついているお母さんがいます。自分から子どもを引いたら自分の中はパーになってしまうというお母さんが非常に多くなっている。そして千葉県当たりではお母さんがどんどんパートで外に働きに行く。子どもが中学生くらいになって自分との距離ができ、物も言わなくなってくると自分は働いて金をやればいい、物を与えればいいと物や金で埋めようとしてお母さんが非常に多くなっている。それよりも自分の頭でものを判断して子どもに見直させるというお母さんでありたいと私は考えます。

夫と妻、嫁と姑

さて次は夫と妻ですが愛するという言葉が氾濫しているけれど言葉で愛するというのはやさしいと思います。私たちの時代のものにはきまり悪くてそんな言葉口に出せないで過ごしましたし一緒に歩くのも一問位後をちよこちよこついで歩くという時代でしたが今はいもう本当に堂々と愛するということを宣言する。けれど宣言はするけど愛し続けることはむずかしいことだと思のです。五十何年生活してみてもこの人がいたから生き甲斐があると思つた時代もあるし、この人がいなければもう少し清々するだろうと思つた時代もあるしで年をとつて今は生きていてくれてありがたいと思つたようになってきて、愛し続けることはむずかしいことだとしみじみ思います。そして夫の気持ちを大事にしなが、うっかりするとやっぱ妻は自分自身のことばかりで要求が先にたっている。夫がどう思っているか思いやるのが足りないのではないかと思うのです。けれども夫が間違っているときに間違っていますというのは非常に勇気のいることです。失敗したとき私などこの年になつても実はこれこれの事情で失敗したのだと話をするのは言いづらいわけなのです。やはり人間というのはむずかしいものだなと思つたのですけれども自分の権利を認めてもらうには他人の権利を大事にしていかなければいけない。

次は嫁と姑です。私はだんだん年をとつてきました結婚する前は歴史の勉強をしていました。家庭の主婦となつても夫と結婚するようになってからも結婚の条件として妻が本を読んでも文句を言わないということと結婚したものですからそれだけは当たりました。私の本を読んでおりましたも怒りません。デパートに何か買い物に行くときは協力してくれませんが神田の古書店などに行くのには協力してくれます。ちゃんと約束を守ってくれたので幸せだなと思つたこともあります。でもだんだん子どもが大きくなつたときにやっぱ自分の城がほしいと思ひました。夫は理論物理が専門ですけれども後に科学史をやるようになり、今年になつても岩波から著書をだしております。机の前に座ることが多い子ども達もみなそれぞれの分野で専門を持っておりますから私だけが少しなにか続けてやれることを持ちたいと思つておりました。若いとき歴史が好きだったものですから年をとつてからも民俗学をやつてみようと思つて、ただ本を買つて読んでいただけじゃなくて・・・と満五〇歳になつたときの暮れに夫に向かって言いました。やっぱ私も勉強したいので

も少し独立したいと言いましたもので夫はびっくりしたらしく、こういう明るいところ
言ったのではなく電気を消してから言ったのでどんな顔をしたか見なかったのですがノラ
の家出みたいなのを連想したらしく独立ってなんだいと言いましたから、やっぱりあな
たに食べさせてもらうのだけれどなんでも今まで中途半端で、もうその時分子どもも高校
にいつていましたから、夕方になると家は遠いからと言って先に帰らさせてもらうし講演
を聞きに行ってもそわそわしてしまうし、講演なら講演で最後までちゃんと聴きたいし「子
どもを守る会」の仕事も机や椅子を片つけるところまで手伝って帰りたいと言いましたら、
それはそれでいいだろうということで、具体的にはどうするのだと言うので、今まで柳田
先生の本を沢山読んでいたけれども柳田国男先生の所へ入門したいと申しましたらそれで
は子どもによく話してからそうしなさいと言われ、子ども達は皆賛成してくれました、そ
れじゃ毎日出かけるのと聞くので毎日じゃないけれど、今までのように夕方に明るい電
気がついていて温かいものができていたりできないけれど、それでいいかい、と言ったら
ある子が僕の方にも要求があるといい、なあーに聞いたら、母さんはなんでも興味津々で
何か一つ覚えると喜んでやってうるさくてしようがないから、もうこれから柳田先生のと
ころで勉強してもああだった、こうだったと余りしゃべらないでくれと言われました。家
は夫が余りものをいわないので私が漫才みたいにああこうしゃべるのでうるさくてしよ
うがないという冗談もありましたけれどもそれ以来正式に入門して今も民俗学会会で東洋
大学での民俗学会で自分の専門の勉強を発表しました。それ以来仕事は仕事で「子どもを
守る会」は続けています。ところで嫁と姑の問題なのですが民俗をやっているものですか
らいろんな民謡とかいろいろなものを見るわけで、「可愛い息子も嫁とりゃにくい、嫁は前
世のかたきなり・・・」というのがありますが本当にそんな気持ちでいる人がいるのです。
私はそれを民俗学の本で知ったのではなく全国を民俗学の採集旅行やなかで歩いたし、
岩手県の二戸の山奥も歩いたのですが、十年ほど前ですがその当時七十から八十の人で「私
ほど苦労した人はいない、一番苦労したのは私だ」と言う人が十人くらい集まってくるの
です。「私が一番この世で情けない目にあつた」という人のなかで息子は親孝行なだけで
嫁を貰つたらとたんに、くるつとひっくり返っちゃつたという人がいっぱい出てきたので
す。そういうなかで夫と妻とお姑さんとの三人暮らしになりますと一人の男性を囲む二人
の女性という三角関係になりかねないわけです。とにかく古い家族関係のなかでは何をお
いても年寄りを優先する。つまり親と子の関係を優先してきたわけです。ここに一冊の本
を持ってきたのですけれども「女大学」です。そのなかに「されば婦人に七去あり」、つま
り嫁に行つたら追い出されるかもしれない七つの事柄があると書いてある。

第一には舅姑に従わざる女は去るべし、つまりお嫁さんを離婚させる第一の理由は舅姑
に従わない場合です。

第二は子なき女は去るべし。これは妻をめとるのは子孫相続のためであるのです。しか
れども婦人心正しくして行儀よく、妬む心なければ去らずとも同姓の子を養うべし、ある
いは妾に子あれば妻に子なくとも去るに及ばず、という。こういう本が明治の初めに女子

用教科書に使われたのです。明治の教科書を私はもっていますが、随分ひどいものです。

第三には淫乱なれば去る。

第四には愷気深ければ去る。

第五にはらい病等の悪しき病氣あれば去る。

私が皆さんに紹介したいのは次の六なのです。六にはまめにて慎みなく物言いすごすは親類とも仲悪しくなり家にいらぬものなれば去るべし。つまり女のおしゃべりは離婚の条件なのです。女はだまれというのです。意志、意見というものは言えない。

七番目はものを盗む心あれば去るべし。

この七去は皆成人の教えなりなどという書いてあってその上もう一つの生活にかかわるところをご紹介すると女は常に心遣いしてその身を固く慎み守るべし。朝は早くより起き夜は遅くいね。でも今の若い人に話すと、女だけが、朝早く起き夜遅く寝るならば昼寝すればいいじゃないかと言います。ところが朝早く起き夜は遅くいね昼はいねずしてと書いてあるのです。家の内のことに心を用いるべし、だから家内なのです。私は年中外に出ているので、どこからか電話がかかってくると、おやじさんは家内は小金井に行っています、なんていつているでしょうけど、このように私たちはまだ家内という言葉を使っています。そして織り縫い生み紡ぎを怠るべからず。なんでも手作りの時代です。そして茶酒など多く呑むべからず。お茶も女は飲んじやいけないのです。歌舞伎浄瑠璃などたわけたこと見聞くべからず。宮寺など、すべて多くの人の集まる所へは四〇歳より下は余り行くべからず。お宮やお寺でも四〇歳以上にならないうちは行っちゃいけないのです。ところが早婚で一八が番茶も出花、二〇歳過ぎれば行き遅れというくらいで早婚でまづいものを食べて働いて四〇歳位にはそろそろ腰が曲がる。その頃にやと行っていい所がお宮やお寺なのです。その頃は、ともかく家の中でよそを見ないで一生懸命働かなければならないのが嫁なのです。そして姑さんはどうかというという家族制度のなかでさんさんという勤めを終えてさあ私の番だと今度は自分がされたとおりにしつぺ返しをしましよとてとんでもないことだったのです。ただただ仲の良い夫婦でも親の前ではよそよそしくするというのが親孝行だったのです。そういう時代を私たちは過ごしてきたのです。ことに親一人子一人の場合はむずかしく、ヨーロッパでは母の在世中には結婚しないのが親孝行だといわれていました。ところが日本ではそうではなく、早く結婚して嫁さんを貰って親を安心させるのが孝行だといわれている。違うわけです。一人息子に嫁さんが来るとその人は苦勞するというわけです。昔のお母さんというのは楽しみがない。本当に新潟の方に採集旅行に行っておりましたら、年寄りばあといがぐりの皮は煮ても焼いても喰えぬといっていました。

私の若い頃に「何が彼女をそうさせたか」という映画があったけれど本当に何が彼女をそうさせたかと言えば家の中で働け働けと言って働かせ社会を見ないでしよ、今のよう社会を見ることが少ない、男の人は社会を見ますから年をとっても遊ぶことが上手です。

碁も将棋もやるし、植木をいじる人もあり、釣りをする人もある。何かしら遊ぶことを知っているが女の人はただ働け働けです。私は人に自慢ができるような母親をもちました。

学問はありませんが、兄弟姉妹は妹と二人切りの姉妹になってしまった今誇れるのは私たちの母親のことなのです。その誇れる母親でも七〇歳くらいまではよかったです。八〇歳の声を聞いたら趣味も楽しみもなにもなかったので困りました。つまり働くこと、家事が楽しみだったのに皆お手伝いさんやお嫁さんがやってしまうので、することがなくなってしまうのです。私などが行って顔を見ると大きい姉ちゃんお腹すいているかい？と。おばあちゃんがそういうだろうと思って、お腹をぺこぺこにして行くのだけれど、お腹すいているわ、と言うと生き生きして割烹着など着ちゃってお台所に立ちます。私たちは姉妹はこれじゃいけないと思ったのです。年をとったときそれでも母は植木が好きで楽しんでいました。私たちが、私たちが、私たちが、カンナ、ダリヤを掘り下げるのがおっくうになって花の咲く木がいいよ、なんていうようになりました。

美しい老年期なんてないそうですよ。杉村春子さんがおっしゃっていましたが、あれは婦人之友社が勝手につけた題で、美しき老年期なんてないんですよ、年をとったときに私たちがどう生きるかと考えなければいけないと思うときに目の前の嫁と姑のことに関わってはいは時間が損だと思ふのです。

そういう時代に生きてきた姑さんほど家風ということ、さつき七去の話をしましたが七つも追い出される条件があると女大学は言っています。七つの条件に合わない嫁がいても追い出したときには家風が合わないということです。家の風と書きますが、なんだかわけのわからないことで、どうでもいいがかりが付けられます。男から言えば三下り半で追い出す時代に昔の女は自分の腹から男の子を産むということが悲願であったわけです。女の子ではいくら生んでも頼りにならないからだめなのです。いざというときに本当に頼りになるのはむすめなのですけど……。皆さんも去年も一昨年も大会でいろいろの話を聞いてお考えになったでしょうが、私のように一人娘は死んじゃって男の子ばかりではしようがないわね、嫁さんとなれ合いでもなんとかやっていくよりしようがないわけです……。

家風なんて言葉がありますので嫁に姑は一生懸命家風を教え込む算段をしますが、これはなかなかむずかしいのです。今年死んだ浅草の友達ですが私と一緒にお墓参りをしていたときに、いつも約束しあって昼食を一緒に食べるのですが、私より十歳くらい上の人です。あるときこういふことを言ったのです。家風を教えるのってむずかしいわね……。その人はとてもきれいな人でしたが、食べものを扱うお店の人でしたけど、自分がまず実践すれば嫁がついてくると思ってお便所掃除をとにかくきれいにしないで毎日磨いたそうです。ピカピカしてきれいなお便所にしていましたが、いくらきれいにしても嫁はやってくれないと愚痴をこぼしたのです。そのときその実の娘と一緒にいましてクスクス笑っていたのです。そして「あらいやだ、母さんは嫁さんに教えるつもりで便所掃除をしてんの、私たち嫁さんと言っていたのよ、母さんから便所掃除を取り上げたら可愛そう

だあれは趣味だねって。便所掃除もそれぞれ分けてやろうよ。何曜日が嫂さん、何曜日が母さん、というふうに・・・。」　　こういうこともあるのです。世代のものの考え方の断絶ということ、片方は一生懸命実践すればよいと思ひ、やってみれば分かってくれて、それでは姑さん私もいたしましようと言うだろうと期待していたのです。その家はそれで解決したのです。お寺さんにお参りし、お寿司屋さんで話をしたので解決したのです。案外話せば分かることもあるのです。つまり嫁さんというのは少なくとも二〇年は異なった文化の家で育ってきた人でしょ、お寿司の味から雑巾の絞り方まで皆違うやり方でやってきてそれが嫁に来て姑さんから、これが雑巾、これが台布巾なんて言われても、どっちも同じくらいのきたなさだなんていうこともあるのです。

イギリスの諺にこういふのがあるのです。どんな広い台所でも女二人には狭すぎる、やっぱり台所の主婦は一人に絞るしかないのです。だから新しいお嫁さんが主婦になればおばあちゃんも横にどいて、まあ台所の台布巾と茶碗拭きとごちやごちやにされてもこまるけれども、でもそれなりのやり方をやっているならそれであんまり文句言わずにやっていく知恵を働かせなければいけないですね。

若い人からみれば誠心誠意で仕えようと思つても、姑のほうかもやもやのはけ口として嫁さんを対象にするしかないように感ずるのではないと思ひます。そしてそれは変えられると思ふのです。たとえばこういう所にきててもやもやを出してもいいし、なんでもかでも女がひつかぶつて、じーっと堪えていることは止めましょう。間違っていることは間違つていふと言つていくとよいと思ふのです。それを我慢するとお互いに人の顔色を見るということになるし、被害妄想ということにもなるんですよ。私の自分なりの解決というのは、嫁と姑の問題で姑を本当の親と思へといつてもそれは無理だということ。また、嫁を娘と思つたつて、うちは嫁さんが三人います。お婆ちゃん、あんまり母親大会に行つて嫁の話をして下さいといわれたけれど、私はせつせつと嫁の話をしていきます。私は嫁は娘とは思いません。六歳で死んだ娘が娘であつて、嫁は息子の所にきてくれた人であるから他人となんとかうまく暮らそうと思つて、もう二十三年くらいも嫁さんとやつていけるけれど喧嘩をしないのです。喧嘩をしないようにがんばつていきます。息子とはいくら喧嘩をしても言い損ないしてもケロッと消えちゃうんです。ところが嫁さんだといつてもも傷が残るものです。私など口が悪いものですからよくパ、パツと言つたのです。そうすると、いついつ姑さんがこうおっしゃつたなんて言う嫁さんもいるんです。やっぱりこれは氣をつけなければいけないなあと思ふのです。

さて女大学の七去という言葉の以前には三従という言葉があり、幼くしては親に従ひ、嫁しては夫に従ひ、老いては子に従へ、と言ひます。今はその老いては子に従う、だけが残つてゐるみたいですがあの三従は奈良朝のとき仏教傳來と共に入つてきたのでしよう。けれどそれ以来ずーっと皆の頭に染みこんでゐる。だから女は理屈を言うことを禁じられていたからいまさら姑と嫁はこうあるべきだといつても、理性的判断の訓練がない人に言つても無駄だと思ふ。理屈で納得させるのはむずかしい。ずーっと先の若い奥様方には訓

練があるのでできるかもしれないけれど、明治生まれ大正生まれの人にはむずかしいだろうと思うし、理性的な判断ができる人は少数だと思えます。

お舅さんからみて、どうしてもとんでもない非常識な嫁だということがよくあります。田舎などで聞くと自分たちで続けてきた生活習慣が分かってくれない嫁をそういう風に言いますし、また嫁の方からいえば、鬼のような姑だと言う場合が沢山でてくる。それを聞かされる親類の人たちもまた困るわけです。嫁からと姑からと両方から聞かされ、そしてまた人に話すのですから、噂の種をまき散らすことになります。だからどうしたらよいか、それには根本的対策と応急処置との二つがあると思います。

根本的対策というのはこれは不幸な母を作らないということです。母親大会では第二三回ですが第九回るときから民主的な家庭づくりという部会の助言者をしています。家に皆さんがいろいろな話をしたノートが沢山たまっていてそれを読んで思うのですが、健康なおじいちゃん、おばあちゃんが長生きしている家は非常に嫁と姑のトラブルがないのです。おじいちゃんが娘の所にやってくる家のはあさんは本当にしようがないというし、おばあちゃんがまた来て家の父ちゃんは・・。と愚痴をこぼすので、私たちはああいう年寄りにはなりたくない、と言う話も出てきましたが、それは別として、概して夫に先立たれた姑さんとしても夫の愛情に満足していた人は鬼のような姑にはなっていないのです。今一人でいて夫との間がうまくいかずに別れた人はなかなかむずかしい。夫には頼れないからと金ばかり大事にする年寄りもいれば、いじめが趣味みたいな人もいます。だからなんといっても皆が健康でなければいけないと思います。それと同時に母親が早く子離れすること、つまりベタベタくっついて歩くテレビドラマの「となりの芝生」のおばあちゃんと息子の場合、しりぞいて大局を見る目がないわけです。近い所で喧嘩してしまうわけですね。早く子離れし自分が生んだのですからちゃんと育てて社会人にするのが大事だと思えます。一人前にしてやることです。父親は割合と早く子離れするけれど母親はなかなかできにくいようですが、子離れするためには子ども以外の生き甲斐をもつこと、この頃はよく旅行してうたを歌っているけれどそれだけでは駄目なのです。年をとると足が悪くなって家にばかりいるかもしれない。目も見えなくなってくる。私も老人性白内障になってきて医者にかかっていますが完全に見えなくなるのは九三歳くらいなのでそのくらいまでには何とか成るだろうと思うのですが、生き甲斐を持つこと、同時に、人間はいくら愛し合った夫婦でも一緒にポコッと行くというわけにはいかないのですから、どっちかが先に行くのです。ポックリ病の神様ははやっていくようですが誰もかれもポックリ行くかはわかりません。だからやがて年をとって孤独になるということがある。その孤独に耐えていくことも考えておかなければいけないと思います。それが根本的なことです。

応急的な処置というのは私はこう考えています。姑は嫁とは他人なのですから他人同士はなんとか譲り合って生きて行こうということを考えていかなければならない。そのためには姑の注文通りに嫁さんが仕えてくれることを期待するのは無理だと思えます。嫁には嫁の人生があるということを考えておかなければいけないけど、一方嫁さん達にお婆さ

んは古くさくてどうこうと言ってもそれは時代が違うんだから、年寄りの立場を理解して欲しいのです。なぜお婆ちゃんはそのような風になっているのか、十分に理解してもらいたいものです。またイギリスの言葉が出ますが、息子は妻をめとるまでの息子、娘は一生の娘、というのがあります。理想を言えば娘と息子と両方あっている心置きなく喧嘩のできる娘があればいいのだけれど・・・私のようにいても死んでしまったのもいますし、私の妹みたいに初めから子どももない人もいます。だから妹は年中老人ホームの話をします。娘と共存共栄ができる人は一番幸せだけれどもなんとか他人と一緒に共存共栄しましょう。嫁さんが姑を理解し、姑が嫁さんを理解するということは大変にむずかしいことです。育ってきた時代が違う環境があり、勉強したことが違うのですから。でもそれをやりたいと思います。

理解というのは許すことではないでしょうか。満足すべきことでなくても、お互いに許しあうこと、そこで許し合ってなんとか生きていくことではないかと思います。ただ譲り合うでは見かけはいいけど、こんなに譲っているのにという不満が残ると思うのです。だから許すと言うことがとても大事だろ思います。だけど許すけど自分がどうしても納得できないことは我慢しないできっぱりいうことが大事ではないかと思います。私は面白いことに気づいたのです。農家の方なのですが三代のお嫁さんの話で岡山県の農家でしたが大きい婆ちゃんがいるのに孫に嫁さんを貰ったから三代のお嫁さん、つまり女達がいたので。近頃貰ったお嫁さんはお婆ちゃんが食事の後片付けをしてくれるといやがるのです。老人って汚いのですね。私も昨日白菜を切ったら白髪が白い葉の中にあり、あら大変と虫眼鏡で一糸懸命取り出しました。さて、真ん中のお婆ちゃんがお嫁さんにどうしてそんなに汚がるのと聞いたら、食器洗いのために水の使い方が少ないというのです。それで中婆ちゃんが嫁さんに言ったのですが、うちのお婆ちゃんはここに嫁に来て百姓をやって大変な仕事のほかに井戸の水を汲み上げて台所にもつけてきて少しの水で食器洗いをするのが習慣になっていたのだから、水道をじゃーじゃー出すようになっても少しの水でちよこちよこと洗ってしまう。そこを考えて上げなさいと言ったそうです。ところが今度は大お婆ちゃんの方からは孫の嫁だからと黙っているのだけれど、なんでもつたいないことをするんだと思う。なんでもじき捨てちゃう。あれじゃ身上がもたないねえと。また中婆ちゃんは言ったそうです。中婆ちゃんは大変なのです。息子の機嫌もとりたいし爺ちゃん婆ちゃんの機嫌もなだめたいしというところですから、大婆ちゃんに言ったそうです。時代が変わってひところは消費は美德だという時代に孫の嫁は育ったんですよと。言葉は少し違いますがもしも説明がよく説明したそうです。そしたら大婆ちゃんはよく聞いて、そのうちうちのやり方を覚えて貰いませよ、と言ったので丸く収まったとの話を聞きました。つまりそのようにお互いに許し合う思いやりということが女の権利を守りながらなんとかやっていくことでなければならぬのです。

次にはなんとか惚けない学習を始終していかなければならない。学習とともに手足を使うということもやらなくてはいけないと思います。なくなった石垣純二さんというお医者

さんがよく言いました。姑を犯罪の跡を残さずに殺す方法は、にくい姑にはなるべく甘いものを沢山食べさせ、姑が出かけようとしたらお危のうございませうからとタクシーを呼んでどこへ行くのでも足を使わせないで車に乗っけちゃうことだ。足を使わないで甘いものばかり食べていけば必ず姑は短命です。私はその話を聞いて一生懸命歩いているのです。今朝も五つの停留所がある所を歩いてきたのです。歩くことも手を使うことも頭を惚けさせない方策です。テレビばかり見ていたら馬鹿になってしまうのですよ。テレビも選んで重要な所だけを見ればよいのです。朝から晩までテレビを見たら馬鹿になる理由はお年寄りでも言葉を忘れるからです。聞く言葉はわかるけれどもしゃべる言葉が減ってしまう。だから同時代の友達が大事です。私など誰かにに会って関東大震災知っていますかなんて聞かれたら三時間くらいべらべらしゃべりまくってしまう。兵隊に行っていた弟の大介は南のニューギニアのマノクワリ島に行ってきた。『南の島に雪が降る』という本が残っていますけれど四万人のうち七千人だけ帰ってきた。その四万人が終戦のときには生きていて、それがどんどん餓死していった本当に悲惨な話をいっぱい私にしてくれたのですが、兵隊に行っていた人たちはそのときの話をいろいろ思い出して話して下さる。ある寒いとき弟に電話で明日はお休みだからいいわね、と言ったら明日朝九時半に靖国神社前に立っているのだと言っています。ロケなのと聞いたら、違うんだよ、ニューギニアで電信部隊の人が皆ちりちりになって、電信部隊だからお互いに声は知っていても顔は知らない、だから、大村益次郎の銅像の前に加東大介さん立っていてくれ、加東大介さんお目当てに皆集まるから・・・とのことでした。大村益次郎の前に集まるのならあなたが行かなくてもいいじゃないの、と言ったのですが、いや自分が行かなければ駄目なんだということで寒い朝に行って立っていたようですが二七人集まったそうです。弟が亡くなったときには兵隊のとき一緒だった人たちがいっぱいいらして下さいました。

私たち兄弟姉妹一生懸命生きているのですが、少しそこに馬鹿という言葉のつく馬鹿兄弟姉妹でして、浅草で生まれ浅草で育つてということで、『南の島に雪が降る』出版のおり弟は姉さんのことを書くころと思つたら編集の人がそういう人のことは省け、と言われ作者のことしか書けなかったと言っていました。四人の兄弟姉妹なんです私が長女でございまして今回六月一〇日にヘレンケラー賞と関係してテレビに出さして頂きましたが、七月一〇日に妹の沢村貞子が随筆の『私の浅草』で日本エッセイスト・クラブ賞を頂き二人が一カ月立たないうちに賞を頂いたということで皆さんに祝って頂きまして生きているうちに評価をして頂いたことは大変幸せだったねといって二人で加東大介の墓参りをしています。あの人も本当によい人だったけれど、癌で死んでしまいました。どうぞお年をとった方々も頑張ってください。

私たちはこういう風な仕事をしております。そして思うことはやっぱり運動をしてその成果が町に反映していかなければいけない。その点小金井老後研究会の方々が一生懸命おやりになってすばらしいと思います。私は千葉県にいますからバスは無料じゃないなど、いろいろありますがこの不況の中で社会福祉が地方自治体の財政難によって狭められて来

ています。老人医療での無料制度が止められるとかいろいろあります。どうぞ小金井は一生懸命結束して老人の権利を守って頂きたいと思えます。

私は障害者運動をして人のためと思っていたらそうではなく、自分のためにしていたということがしみじみ分かってまいりました。横断歩道がよくなれば、障害者だけではなく老人にも横断しやすくなるし、段差が低くなれば非常に歩きやすいし、妊産婦にも子どもにも歩きやすく、まちづくりは非常に便利になることがわかりました。人のためだと思っただけが我が身のためだということになにか恥ずかしいような気もします。日本人に一番欠けていることはサービスだと思います。サービスの再分配ということをして老人医学の権威ある人がこの頃いつていますけれども、まだ自分でサービスできる間はなんらかの形でサービスし、自分が動けなくなるときに返して頂くよう考えねばいけない。

どうぞ頑張つてこの集いをますます大きくさせて頂きたいです。大変長い話が浪花節調になりましたがこういうことをして生きている人もあると、女性自身でなく老人自身のこと話が終わらせて頂きます。

一九七七年一月二日 小金井老後問題研究会での講演